『闇の奥』解釈(4)

竹森　修

マーロウがクルツの名を初めて耳にしたのが他ならぬこの会計主任からであったということは興味深いことである。

或る日のこと、彼は机から頭も上げずに言ったものだ。「奥地で君はきっとクルツ氏に出会うだろう」。クルツ氏とは何者かと尋ねると、彼はそれは或る一流の代理人(エイジェント)だと言った。そんなことかと僕ががっかりするのを見て、彼はペンを置いてゆっくりこう言い足した、「彼は非常に注目に価いする人物ですよ」。(六九頁)

この偽善の「おか者」の口の内側には暗い虚無の深淵が大口あけており、この大口が「おか者」自身の虚妄性について「おか者」の口を通じて絶えず語りかけているのであって、会計主任の口から出るクルツの名は本来、この深淵の主(ぬし)である内的クルツがみずから名乗り出ていることを物語っている。尤も内なる声を聴く耳をもたぬ彼にとって、クルツの名は主体的には彼には無縁である。一方、根底的現実においてはこの会計主任と同じく「おか者」であり、同じ内的状況をかかえているマーロウにおいては、クルツの名はやがて主体的意味を帯びて

くる。彼が偽善の「おか者」からクルツの名を聞いたとき、実は彼は同時に彼自身である偽善の「おか者」の口を通してみずからを名乗る内的クルツの名を耳にしたのである。

自己満足的な「おか者」である会計主任にとって、クルツは単純に「一流の代理人」であり、その意味で「非常に注目に価いする人物」であり、とり入っておけば自分の出世に役立つかもしれないという意味でも「注目に価いする人物」である。従って、彼のいう「奥地」(the interior)もまた単純に大陸の「奥地」である。つまり、この会計主任は彼自身の内奥(the interior)の内的クルツの存在に全く気付いていないのである。しかしながら、マーロウにおいては、「奥地で君はきっとクルツ氏に出会うだろう」という会計主任の言葉は、話した者にも聞いたマーロウにも全く思いもかけなかったことに、外的にして同時に内的な体験として実現するのである。人間存在として同じ内的状況にありながらも会計主任とマーロウとの間にみられるこの相違は、勿論、前者が「おか者」であることに満足している「おか者」であるのに対し、後者が「おか者」であることに不満足な放浪者的「おか者」であるところからくる。なるほどクルツ氏はマーロウにとって、いまだ機熟せぬ現在、何者であるかも知られず、また聞いてがっかりするようなただの名前にすぎず、そのことはクルツとの出会いの過程が同時にそのまま彼自身の内的クルツとの出会いの過程になっていることからして、内なるクルツがまだ自覚的に問題化していないことを意味するが、とにかくクルツは外にして内なる「奥地の奥の奥」(the very bottom of there—六九頁)においてマーロウがやがて出会うべき外にして内なるクルツとして、「非常に注目に価いする人物」なのである。しかしクルツなる人物が、単なる名前としてにせよ、ここにいよいよ登場してきたということはそれこそ注目に価いすることである。というのはこれまでマーロウにとって「目鼻立ちがなく」(featureless)「無定形」(formless)であった彼の外にして内なる闇の力(根源的自然)が、このクルツにおいてマーロウにとり漸

くひとつの焦点とかたちをとりはじめようとしているからである。

実際、マーロウにとって「闇黒大陸」はひとつの運命的な意味を包含している。或はそれは運命そのものであるといってもよい。というのは「闇黒大陸」に渡ることによってマーロウは彼を回心へと導く他処では得難い様々な体験に出遭ったのであり、また彼の回心の決定的契機となったあのクルツとの出会いが可能となったからである。その意味でマーロウにとって「闇黒大陸」とクルツとはひとつであり、彼の運命に他ならない。クルツは「闇黒大陸」が孕む一切の問題の包括的な具現体である。そういえば、クルツ自身にとっても「闇黒大陸」は彼の運命であるといわなければならぬ。なぜならクルツはこの「闇黒大陸」に来ることによって、あの彼の死の直前の最後の言葉「恐怖！恐怖！」が物語るように、彼自身の内なる、彼自身の正体なる普遍的クルツに、つまり、彼自身の運命そのものに出会うことになったからである。マーロウの体験の本質もまたそのようなものであり、マーロウは個別的クルツとの出会いを決定的契機として彼自身の正体である普遍的クルツに出会ったのである。この普遍的クルツ、普遍的霊――或はその意味において宇宙霊――（八三頁の Mr. Kurtz was a 'universal genius'. は、それを口にした「中央出張所」の所長の手下がいう「万能の天才」という意味からはなれて、自己満足的「おか者」の当人自身が思いも及ばぬような「普遍的霊」「宇宙霊」の意味を内包している）はこの「闇黒大陸」のすべての文明人たちに、ありとあらゆる機会を捉えて彼らの文明的自我の虚妄を曝露しようと脅かす。或ときはフランス軍艦の空虚な砲撃の中に、或るときは「鉄道建設」のための空虚な爆破作業の音の中に、或るときは虚空に車輪を向けてひっくりかえっているトロッコや錆びたレールの山積みや、或はその意図の測り難い「でっかい人工の穴」（六五頁――それは「罪人たちに仕事を与えるという博愛精神と関係があったのかもしれない」が、その穴自体この空虚な偽善的「博愛精神」の実体を象徴的に曝露している）の中に、或るときはあの黒人たちの「死の森」や、小道の近く長

くのびた草の中に横たわっている仕事中に死んだ運搬人夫の姿（七一頁）――dead in the harness は「仕事中に死んだ」というだけでなく、文字通り「馬具に縛られた馬車馬のように酷使され死んだ」ことを意味する）の中に、この普遍的霊が現われて、文明人たちに彼らの正体の自覚を迫るのである。

この普遍的宇宙霊はつねに「ひとつのおおいなる沈黙」（七一頁）であり、あらゆるものの「周囲にそして上に」そして中にあって静まりかえり、そこに展開される一切の文明的な動きの、死の馬鹿踊り的実体を浮彫りにさせる。「おおいなる沈黙」は本来「おおいなる静寂」でなければならない。それは無限に開かれた静寂の世界であり、一切の音の成立を可能ならしめ、一切の音がそこから生じそこへと回帰してゆく静寂であり、言葉はその静寂の充溢であり体現であるような言葉でなければならない。そこでは音と静寂は相対立するものでは決してなく、無限に開かれていることによって相互に還元可能な、同質的なものでなければならない。しかし現実には言葉はそれの根源的なるものから遠く遊離して空語化し、排他的な、それ自身閉ざされた騒音と化しており、かくして「おおいなる静寂」はそれと対立的な、それにとって脅威的な、閉ざされた静寂、つまり、「おおいなる沈黙」として一切を暗く包み込んでいるのである。しかしまた「おおいなる沈黙」はときに日常的騒音と全く異質の音となって、「おおいなる静寂」そのものの雄弁な声を聴くことを忘れて久しい者の耳に響いてくる。一切の文明的騒音が死に呑み込まれた夜など、

遠い遥かな太鼓の響きが、或は沈み、或はたかまり、或るときはおおきく、或るときはかすかに聞えてくる。それは不気味な、訴えるような、なにかを暗示するような、そして野性的な――そしておそらくキリスト教国の教会の鐘の音に劣らず底深い意味のこもった音である。（七一頁）

それは虐げられた者たちが打ち鳴らす太鼓の中に凝縮され、ひとつの音となって現れたあの「おおいなる沈黙」に他ならず、虚妄の音、文明的騒音に対して、これは真実の音であり真実の沈黙である。或はこの沈黙こそ真実の音であり、われわれの日常性の耳が自覚的に聾になることによってはじめて聞えてくる内なる暗き深淵からの沈黙の声である。「闇の奥」(heart of darkness) から聞えてくる遥かなるその太鼓の響きは、それを聴くマーロウの内なる「闇の奥」「闇の心臓」(heart of darkness) から発する真実の生命の鼓動の響きとひとつになった、外にして内なる音である。それは文明人にとって「不気味な」、そして彼らによって虐げられ殆ど圧殺されかけた者たちがその事実を「訴えるような」、そしてまた文明人たちに、彼らの征服がかえって彼ら自身の被征服、彼ら自身の内的死の世界の形成であることを「暗示するような」、そして彼ら自身の洗練された内的衰弱とは対照的に、生命に燃える「野性的」な太鼓の響きであり、さらにまた「キリスト教国の教会の鐘の音に劣らず底深い意味のこもった音」である。なぜならこの太鼓の響きは教会の鐘の音と同じものだからであり、それは「偽善と不法とにて満つる」(マタイ伝第二十三章) 文明世界を廃て、いまや「闇の奥」深く「隠れいます神」、或は文明世界それ自体の内なる「闇の奥」深く「隠れいます神」の、人の世の死を歎きその復活を願う大悲の声である。しかしなによりも大事なことは、この「闇の奥」からの太鼓の響きに耳傾けるとき、実はマーロウは、彼自身未だ無自覚ながら、かかる「偽善と不法」の文明世界の一員であり、且つまた「偽善と不法」の自我という人間存在に本然的現実として立っているマーロウ自身の内なる、つまり、自己自身の内なる「闇の奥」「闇の心臓」から発する本来的自己(大悲)の生命の鼓動の響きに耳傾けているのである。それは日常的な自己愛としての自己にとって「不気味な」、そしてかかる日常的自我によって虐げられ殆ど圧殺された本来的自己がその事

実を「訴えている」、そしてまた日常的自我のかかる征圧がかえって人間存在としてのおのれの死に他ならないことを「暗示する」、そして日常的自我によって「闇の奥」へと逐い苦しめられながらもなお死に絶えることなく生命の鼓動を搏ちつづけ、日常的自我の虚無の侵入が消え去るときの到るのを待ちつづける本来的自己の「野性的」な「闇の心臓」の太鼓の響きである。まことに、内なる「闇の中核」「闇の心臓」は本来的自己そのものであり、本来的自己の生かされてある大悲の世界である。或はそれは、「視よ、汝らの家は廃てられて汝らに遺らん。われ汝らに告ぐ、『讃むべきかな、主の名によりて来る者』と汝らのいう時の至るまでは、今より我を見ざるべし」、とていまや姿を消されしあの「隠れいます神」の「翼の下」である。それゆえにこそ「闇の奥」から聞えてくるこの太鼓の音は「キリスト教国の鐘の音に劣らず底深い意味のこもった音」であり、教会の鐘の音と同じ音なのである。しかし人間的体験としては、この「闇の奥」なる普遍的本来的自己はあの普遍的クルツなる「普遍的霊」としてしか顕現しないのかもしれない。つまり、死の直前のクルツの「恐怖！恐怖！」という叫びにおいてはじめてクルツが出会った如き、或ははじめてクルツが帰一した如き普遍的クルツ、「普遍的霊」である。その普遍的、宇宙的とは存在そのものに係る普遍的問題であるということ、つまり、普遍的に「自己」に係り、また「自己」を問うものとして捉えていかなければ意味をなさないということであるが、「恐怖！恐怖！」の叫びに示された「闇の奥」におけるクルツの地獄の体験、執着的自我としての自己の救われなさの自覚がとりもなおさずクルツ自身の、内なる普遍的クルツとの出会いであり、内なる普遍的クルツそのものであるとすれば、私自身の救われなさの自覚こそ私自身の内なる普遍的クルツとの私の出会い、或はそれへの私の帰一ということでなければならぬ。救われなさの自覚はいいかえればいかにしても本来的自己として立つことができないおのれの救われなさの自覚であるが、この自覚そのものが逆理的にも本来的自己そのものであり、それを離れて本

来的自己はない。そして救われなさの自覚として立つことがそのままに、無限に開かれた大悲の世界に生かされてあることでなければならぬ。「自己」におけるこの救われなさの自覚としての普遍的クルツ、「普遍的霊」こそは隠れいます普遍的神への帰一であり、その存在証明に他ならない。

さて、先の会計主任が「ひとかどの」人物であるとすれば、「中央出張所」へ向かう途中でマーロウの連れとなった白人もまたひとかどの人物であるといわなければならぬ。この男は、「どちらかというと太り過ぎで、木蔭や水が少しでもあるところから幾マイルも離れた暑い丘の中腹で気を失うという腹立たしい癖がある」（七一頁）という、この「闇黒大陸」にはおよそ不向きな男なのだが、「意識を取り戻すまで頭の上に自分の（マーロウの）上衣を脱いで日傘（パラソル）みたいにかざして」やらなければならないような病弱な男であるくせに、「一体どういうつもりで此処へ来たんだ」とマーロウが訊くと、「勿論金儲けの為さ。なんでそんなことを訊くんだね」、と逆に蔑むように訊き返すという大変な人物である。この男の金銭欲は彼を住み慣れた文明的秩序の世界からこの困難に満ちた未開の大陸に遥々連れ来たり、自己破壊的にも彼自身を虚無の「死の海」に引き込むほどに強い執着になっているのであり、しかもその虚無の深淵に半ば引張り込まれながら、なお他者の助けを借りることによってかかる日常的自我にしがみついているという八方破れの、破れかぶれの「おか者」である。意識を取り戻すまで頭上にかざしてもらう日傘（パラソル）代りの上衣はまさしく日除け（parasol）であり、外にして内なる時間的「闇黒大陸」の怒れる烈日（the fierce sun）の直射にひとたまりもなくやられて気を失い、虚無の「死の海」の中で溺死（六三頁参照）しかけながらも、他者の助けの日除け（パラソル）のおかげで溺死し損ねて再び日常的自我へと「意識を取り戻す」ということを繰り返し、溺死し損ねることによっておのれの真実の状況を知り損ねてもいるのである。

しかしこれまた他人事ではない。凡夫の自己もまたおのれの苦楽の生活においてはるかにより不徹底なかたちで同じ事をくり返しているのである。

いずれにしても、「個人の内面的変化を現場で観察したら科学のために興味深いことでしような」（五八頁）と言ったあの老いぼれ医者の言葉が、医者自身が意図しなかったような意味においてマーロウの記憶に（七二頁）そしてわれわれの記憶にも甦ってくる。熱病に罹った右の強欲な白人がハンモックごと担ぎ人夫の土人たちによって「やぶの中に棄てられ」て、「呻き声」をあげ「震えの発作」に襲われながら、復讐のために「だれかを殺してくれと僕にせがむ」様子は、あの会計主任が「あの蛮人たちが死ぬほど憎くなる」のと同じで、この「闇黒大陸」にあって、二人の内部にはたしかに「医学的に興味深い」変化がその外にして内なる「闇黒大陸」の陰微な作用によって起りつつあることを示している。「やぶの中に棄てられ」（wrecked in a bush—七二頁）とはおのれの外にして内なる「闇黒大陸」の「死の海」の中で文字通り「難破した」（wrecked）自己愛号を意味するものであり、その熱病の「震えの発作」（horrors）はまた、熱病となって現れたこの脅威的「死の海」に対するあからさまな、文字通りの「恐怖」であって、あのクルツの「恐怖／恐怖！」（The horror ! the horror !）という地獄の恐怖感覚と（その体現の仕方が前者は病理学的であるという相違はあるが）根底的には同じものなのである。「蛮人たち」に対する彼らの憎悪はまさしく「闇黒大陸」とそれに属する一切のものに対する、つまり、死神に対する憎悪であり、「死ぬほど」（to the death—二七頁）「憎くなる」とは日常的自我にとって「耐えがたいほど」、日常的自我が「死ぬほど」ということであり、それは死神が彼らを「死の海」の中に溺死せしめようと脅かしていることを物語る。しかもかかる脅威的「闇黒大陸」の「死の海」へ入り込んできたのは彼自身であり、これまた「嫌悪すべきもののもつ魅力」（the fascination of the abomination—五〇頁）、執着の蛇の自己破壊的魅力のなせ

る仕業である。尤もそれはついには自己愛号の難破で了る如きどこまでも無自覚な「おか者」の船旅ではある。従って日常的自我からの日常的自我の必然的自己疎外という右の奇妙な「内面的変化」は医者の言に反して、医学的見地から興味深いのではない。病理学的見地からの「内面的変化」など、マーロウの言い草ではないが、「そんなことはみんなどうだっていい事だ」(七二頁)。つまり、右の「内面的変化」を病理学的見地から取り上げようとすること自体問題の本質を見失っているのであり、それこそ自己満足的「おか者」のすることである。「老いぼれ医者」が「個人の内面的変化を現場で観察したら科学のために興味深いことでしょう」といえるのはその「現場にいない」からであり、彼自身が外にして内なる「闇黒大陸」の現場に身を置いたら科学的客観的観察どころではなくなるのである。しかしながらひるがえってみるに、逆境によって惹起される「内面的変化」はまことに微妙なアムビギュイティを内包するものである。「苦悩の能力」の充分に強くない者においては、「内面的変化」はいわゆる精神病理学的肉体現象として発現してしまう、つまり、自己の内的虚無(ニヒリズム)の「死の海」において「難破」してしまうのであり、それに対しては精神病理学的治療法を適用し、いわゆる正常な「おか者」の状態に引き戻すしか他に術(すべ)はない。これに対し「苦悩の能力」の充分に強い者にとって、「内面的変化」は真実に人倫的問題として体現されるのであり、かかる「内面的変化」は外にして内なる「死の海」の只中にあってその「死の海」の導きに従う「自己愛号」の試練の船旅の進行を意味するものなのである。しかしながら、マーロウ自身が「科学的に興味ある人間になりつつあるように感じた」(七二頁)ほどにこの「内面的変化」のアムビギュイティは微妙なものである。究極的にいって、マーロウを内的「死の海」での「難破」から免れしめたものは、後に彼自身一般的にいっているように、「主義」(principles)ではなくて「ど根性」(his own inborn strength—九七頁)つまり、逆境を主体的に受けとめてゆく「苦悩の能力」に他ならない。

十五日目に僕は再び例の大きな河の見えるところに出、びっこをひきながら中央出張所に入った。それは雑木林と森林に囲まれた淀みのほとりにあり、一方の側は悪臭を放つひどい泥地で縁どられ、他の三方の側は荒れ放題の藺草の垣で囲まれていた。放ったらかしの垣の切れ目が唯一の門で、その場所を一目見ただけで、例の筋肉のたるんだ悪魔がそこの一切を取り仕切っていることが分るのだった。（七二頁）

大蛇のかたちをした例の大河が再び視界に入ってくるということと、「中央出張所」に辿りつくということが同時的であるとはまことに興味深いことである。「例の筋肉のたるんだ悪魔」とは先の号で触れた「筋肉のたるんだ、うわべをつくろう、しょぼしょぼ眼の、その実、強欲で無慈悲で愚劣な悪魔」（六五頁）、つまり、偽善の悪魔である。そういえば長い棒を手にしてこの「中央出張所」を見張りする白人たちの姿は偽善の悪魔の手下の赤鬼青鬼をおもわせる。この「中央出張所」はいわば、「闇黒大陸」における一切の文明的偽善的なるものの「中央出張所」であり、しかもそれの虚妄的非在的正体がむき出しにされた「中央出張所」である。右の「中央出張所」の場景描写はまさしく「不気味な背景幕を前にして演じられるなにか薄汚い茶番劇」（六一頁）を思わせる。「中央出張所」が面している「淀み」や「悪臭を放つ泥土」は偽善の巣窟である「中央出張所」の生ける死、内的腐蝕を暗示している。「中央出張所」は、それを取り囲む暗い森林にひそむなにか闇の力（出張所の代理人（エイジェント）たちの外にして内なる）とでもいうべきものの間断なき腐蝕作用に侵されて、その見かけ倒しの「アップルパイ的秩序」すら崩壊し、「荒放題の藺草の垣」に明証された無秩序状態がこの「中央出張所」を支配している。それは文明世界から遠く隔絶したこの「闇黒大陸」にあって恥や外聞を恐れる必要もないゆえに内的「抑制」作用を失

い、これまで「抑制」し偽善的に隠蔽していたところの最初から混沌そのものである正体をむき出しにし、しかもむき出しにしているおのれの姿に気付いてさえいない、偽善の悪魔の暗躍するまさに茶番劇的「中央出張所」である。それは人倫的に実存していないゆえに幻たちを登場人物とする茶番劇である。この「中央出張所」の「不気味な背景幕」を形成する暗い密林の中には、あの大河が大蛇のように横たわっている。「まるでとぐろを解いた途方もなく大きい蛇そっくりで、頭は海に漬け、胴体は広大な大陸に遠くくねくねと横たわり、尻尾がはるか陸地の奥底に姿を消している」(五二頁)この「ばかでっかい河」の、外にして内なる時間の河としての存在意義については前々号ですでに述べた。マーロウはこの大蛇の口の中にすでに決定的に身を投じてしまっている。なぜならこの大蛇の大河は外にして内なる「闇黒大陸」全体に遍満する闇の力の具現体であって、「闇黒大陸」に踏み入ること自体その意味においてこの大蛇の口に身を投ずることだからである。しかし、それにも拘わらず、この「中央出張所」に辿り着いたときはじめてこの「大蛇の河」がマーロウにおいて真実に問題化するものであることを忘れてはならない。だからこそ「大蛇の河」がいま再び彼の眼前に姿を現わしたのである。「闇黒大陸」の闇の力がこの「中央出張所」のそばにおいて「大蛇の河」としていまや再びマーロウの眼前に出現したということ、「中央出張所」と「大蛇の河」とのこの並置はまことに興味深い。というのは、「闇黒大陸」に上陸して以来これまでマーロウが経験したことはこの大陸における文明人たちの偽善的所業とその正体の曝露であり、いいかえれば、それはむしろ他人事として対象的に見聞されたものであり、その意味ではマーロウ自身が深く関るような主体的経験になってはいなかったのである。ところがいまこの「中央出張所」に到って、他者の偽善的所業がはじめて彼自身をのっぴきならないかたちで、つまり、主体的に捲き込んでゆくことになる。かくしてはじめて外にして内なる「闇黒大陸」の「死の海」における船旅がその「闇の中核」に向って真実の意味で始る

のであり、それゆえに、「闇の奥」へ通じる「大蛇の河」がこの船旅の航路として「中央出張所」の近くでマーロウの眼前に再び現れるのである。別にいえば、これまで無自覚のうちに船乗りマーロウを導いてきた外にして内なる「闇黒大陸」の「死の海」そのものである運命の女神（四八頁の the sea…, which is the mistress of his (a seaman's) existence参照）が「大蛇の河」、「闇の中核」へとマーロウを導くべき「死の海」の航路なる「大蛇の河」としてここに自己顕現したのである。その意味で「中央出張所」はマーロウにとって右の船旅への本格的な出発点となっている。その決定的契機はマーロウが船長として乗組む予定であった河船の沈没事件である。

この沈没事件の発端は、マーロウが「中央出張所」の総支配人に会ったとき彼の口から聞かされたところによれば、

> 僕が途中あんまり時間がかかったので、待っておれなくなり、僕なしで出発しなければならなかったとか、あちこちにある上流の出張所へ交代要員を送らなければならず、すでに度々の遅延で、一体誰が死に誰が生きているのかも、またどういう経営状況なのかも見当がつかなかった、等々、等々……またいうには、或る非常に重要な出張所が危殆に瀕しており、そこの主任のクルツ氏が病気だという噂がながれているが、それが事実でなければよいが……（七五頁）

こうして上流の出張員たちの救難を口実として支配人はマーロウの到着を待たないで船を出したというのだが、その結果が座礁沈没である。それは明らかに、クルツをめぐる陰謀に暗躍する偽善の悪魔の所業である。マーロウは「中央出張所」とその支配人の中に「筋肉のたるんだ悪魔」をみたように思うのであるが、この沈没事件は

「筋肉のたるんだうわべをつくろう、しょぼしょぼ眼の、その実、強欲で無慈悲で愚劣な」偽善の悪魔としての支配人の正体を曝露しているだけではなく、同時にまた、沈没した船が彼自身が船長として乗組むべくはるばるやって来た当の目当ての船であったがゆえに、それこそのっぴきならぬかたちで彼自身に関る事件でもあった。のっぴきならないとは一体何を意味するか。その真実の意味はマーロウ自身にもその当時は分らなかったのである。

僕はあの難破の真実の意味を直ぐには分らなかった。今はそれが分るような気がするが、しかし自信がない——全然ね。確かにその事件はあんまり馬鹿げていて——考えてみると——どうも不自然に思えた。それでも……しかしとにかくそのときは僕にはただ全く困った事として受けとられただけであった。（七二頁）

この表現はまことに曖昧である。この曖昧さの含意するところを知るには、先ず、河船の座礁がそのまま彼自身の座礁になっていることを了解しなければならない。なぜなら彼はこの船の船長になるべくはるばるやって来たのだから、河船の座礁はマーロウにとって「全く困った事」であったが、しかしわれわれの常態は自己満足的「おか者」つまり、内的な時間の「死の海」に浮ぶ船としてありながらその事実を知らぬ自己満足的「自己愛号」であるゆえに、かかる自己が投げ込まれる逆境はすべて、主体的にはこの自己満足的「自己愛号」を座礁せしめる逆境となるのである。かく河船の沈没事件はマーロウにおいて自己満足的「自己愛号」としての彼自身の沈没という直接的体験を彼に与えることとなるゆえに、それは「全く困った事」でありながら、この主体的角度からみるとき、まことに有難いことであるといわなければならない。そのことを意識するマーロウはだからこそ当時

を振り返って、「確かにその事件はあんまり馬鹿げていて――考えてみると――どうも不自然に思えた。それでも……」という曖昧な発言をしているのである。この沈没事件は、マーロウが内的「闇の奥」への本格的船旅に向うためにどうしても経なければならない事件であるのであり、それはそれ自体としては「あんまり馬鹿げていて……どうも不自然に思える」事件でありながら、かく主体的には決して馬鹿々々しくも不自然でもないのである。だからマーロウが「僕はあの難破の真実の意味を直ぐには分らなかった」と言ったとき、それは事件の責任者である支配人の意図とか、事件の予測される影響とかいった外部的事柄についていっているだけでなく、右の如き主体的意義について語っているのであり、また、そういう一切のものを含めて「難破の真実の意味」を「今は分るような気がするが、しかし自信がない――全然ね」とマーロウが言っているのである。実際、その主体的意味は「分るような気がするが、しかし自信がない」ものなのである。というのは、「自己」を問う逆境を主体的に受けとめてたとえわれわれが「おか者」としての自己の自然的現実を自覚するに至ったかにみえても、喉元過ぎれば熱さを忘るで、直きにその自覚は消えてしまう、つまり、その「難破の真実の意味を」確実に把握していないのであり、かく「自信がない」ゆえに、その全面的意義を把握するために幾度でも自覚的にくり返されなければならない「難破」なのである。この「難破」は「自己愛号」の難破としての主体的意義を内包するものであるが、それゆえに、「闇の奥」でのクルツとの出会いを通じて得たあの究極的な内的自覚――救われなさの自覚、「自己愛号」の虚妄性の決定的自覚としての「自己愛号」の自覚的難破沈没（「闇の奥」はまさしく「死の海」の「底の底」(the very bottom of there―六九頁参照)に他ならない)――を、この「難破沈没」事件に遭遇しただけで、いや極端にいえば、わざわざ外なる「闇黒大陸」にまで出かけなくても文明世界の内部において成就して然るべきであったのであるが（というのは「闇黒大陸」とは自己の内的現実なのであるから）、しかしマーロウに

おいては未だ内面的機が熟せず、やはりクルツとの出会いを待たなければならなかったのである。沈船は例の大蛇の河の底から引き揚げられ修理される。それは元の「自己愛号」への逆戻りではあるが、しかしこの修理された「自己愛号」はやがて外にして内なる「闇の奥」へと船出する定めにある「自己愛号」なのである。いずれにしてもこの沈没事件は「闇黒大陸」における従来の諸々の経験とは異り、彼自身に関る脅威的大事件であったがために、それはとりわけ主体的体験として深く彼の内部に沈み、彼の内的「闇の奥」への船旅を逆理的にも促進せしめることになるのであり、つまり、おくれることが進めることになるのであり、従って裏からみれば、この沈没事件の中にも闇の力、運命の女神のさし招く愛の手をわれわれはみることができるのである。

さて、マーロウが会見した総支配人の人物描写はまことに興味深い。

彼は顔つやも目鼻立ちも物腰も声も月並みであった。彼は中肉中背であった。彼の眼は普通の碧色で、著しく冷やかな眼だったように思う。そして彼はたしかに彼の視線を斧のように鋭く重く相手に落すことができた。しかしこうした時でさえ、彼の体の他の部分はすべてそういう意図を打ち消しているようにみえた。眼の表情の他にといえば、彼の唇の一種形容しがたいかすかな表情があるだけだった。それはなにかこう陰険なもの――一種の薄笑い――いや、薄笑いともちがう――憶えてはいるんだが、どうも口で説明しがたいね。それは無気味なものだった、この薄笑いは。尤も彼がなにかものを言った直後にそれは一瞬強まるのだった。それは彼が一言話し終る度毎に表れるのだ。まるで言った言葉に封印を押したみたいにね。そのおかげでどんなありきたりの文句でも全くもって計りがたい意味を蔵しているみたいにみえるんだなあ。彼は若い時からずっとこの地方で雇われて仕事をしていた普通の交易商人で、ただそれだけの男だった。部下の者たちは彼のいうこと

に従いはしたが、彼に愛情も畏怖の念も、尊敬さえも感じなかった。感じたのは不安だけだった。そうだそれだ。彼の唇の表情から感じられるといったのは不安のことだ。はっきりした不信というんじゃなく、ただの不安、それだけのことさ。こういう、ええと、なんというか、そう、こういう才能がどんなに効果的なものか想像もつかない位だ。（七三頁―傍点筆者）

右の引用の中に「普通」を意味する単語が五つもみられるということは興味深いことである。それはこの支配人が普通人と変りがないことを意味するものであり、前号で触れたあのヨーロッパの本社やそこに勤めるあの案内係の女たちについての描写（五五―五六頁）において「地味な」とか「飾られざる」とかいった単語が盛んに使われているのとよく似ている。普通人と変りないこの支配人はしかしどうやら偽善の悪魔であり、マーロウが「中央出張所」に到着したときの、「例の筋肉のたるんだ悪魔がそこの一切を取り仕切っている」という彼の印象が、支配人との接触を通じてこの支配人の中に個体化されてゆくのである。この男は「たくましい、精力的な、血走った眼の悪魔」づらをしておらず、その意味において「筋肉のたるんだ、うわべをつくろう、しょぼしょぼ眼」の普通人なのだが、しかし「その実、強欲で無慈悲で愚劣な悪魔」であり、表面はいかにも人が好さそうにみえながら、かげにまわってはおのれの私欲のためならマーロウの汽船を沈め、そのため上流の出張員たちを生命の危険に陥れることを何とも思わぬ偽善の悪魔である。そのような彼の正体がそのまま彼の全身に表れている。彼は「顔つやも目鼻立ちも物腰も声も月並み」であり、「中肉中背」で、眼も「普通の碧色」であり、極く「普通の交易商人」であったが、しかしそれがうわべだけのものであり、「うわべをつくろって」いるものであることを彼の眼の表情が物語っている。眼の表情が彼の正体を曝露している。D・H・ロレンスによれば、眼は「生

命の焔」が最も燃え沸ぎるところでなければならないが、支配人の眼はまるで生命の焔が消えて氷と化したかのうに「著しく冷やか」で、彼の視線は相手の人格をざくりと切り殺そうとでもするかのように「斧のように鋭く重く」落ちかかるのだった。それはなによりも彼の自閉的な内的世界とそこでの彼の居直りの事実を物語る。それからまた彼の唇の表情がある。彼の唇の得も言えぬ不気味な表情は、「彼が一言話し終る度毎に表れ」、そのために「どんなありきたりの文句でも全くもって計りがたい意味を蔵しているみたいにみえる」。彼の唇に浮ぶこの表情はひとつの「封印」であり、この「封印」によって閉ざされて外側から見えないその背後にはなにか測り知れないものがあるように感じられて、見る人になんとなく「不安」を感じさせる。しかしその背後には何もない。閉ざされた唇の背後に彼の空語を生み出すただの空虚が拡っているだけなのだ。もし彼の唇の表情にひとが「はっきりした不信」を覚えたとしたら、その表情のかげに「はっきりした不信」を感じさせるようななにか手ごたえのあるものがあったであろうが、しかしひとが覚えるのは「ただの不安であり、それだけのこと」であり、実は封印のような彼の唇の表情の背後に丁度うつろなる口腔が拡るようにうつろに拡る自然的ニヒリズムの空虚に覚える不安にすぎないのだ。この唇の表情は支配人としての彼の威信を保つうえでまことに有効な「無意識の」武器であるが、しかしその得体知れぬ唇の表情がかえって彼の内面的空虚さを強調するという効果をもっているのである。実際、彼は支配人としても内容空疎である。

組織の才もなければ、独創の才もなく、秩序保持の才すらもなく……学問もあたまも零であった。地位の方が彼に転がりこんできたのだ。——何故に？おそらく、彼が一度も病気したことがないからだろう……彼はあの外地で三年の任期を三度勤めあげた……なぜなら肉体の健康の総崩れの中にあって勝ち誇る健康はそれだけ

でもひとつの力だからね」。（七三―七四頁）

あのおしゃれな会計主任がおしゃれと仕事を彼の無意識のバックボーンとすることによって、外にして内なる「闇」の混沌化の力に捲き込まれるのを免れていたように、この支配人もまた、様々な熱帯病で他の出張員たちが蝿のようにばたばたと斃れてゆくなかにあって、彼のおどろくべき肉体的健康をバックボーンとすることによって、彼の外にして内なる「闇」の死神に呑み込まれるのを免れてきたのである。それは「それだけでひとつの力」であり、彼を支配人の地位に引き上げるのに充分な力であった。しかしながら、これを「二重レンズ」でみるならば、そのバックボーン自体が災いして彼は、外にして内なる「闇黒大陸」の「死の海」の真只中にありながら、ついにその事実を自覚する機会を失し、「堅い大地」としての自我の迷妄なるを自覚する機会を失し、自己満足的な「おか者」としてとどまることにもなるのである。「休暇で故国に帰ったとき、彼は大規模に、派手に乱痴気騒ぎをやらかすのだった。まるで陸（おか）に上った水夫だ。違いといえば、表面だけのこと」（七四頁）。陸に上った水夫は派手に乱痴気騒ぎをやらかす。そのような水夫は「円形の孤独」の死の海における脅威的経験を主体的に受けとめて、自閉的な「円形の孤独」の死の海という自己愛としての自己の内的境位を自覚するという「苦悩の能力」をもたず、欲求不満というかたちでしか受けとめることができないゆえに、積りつもった欲求不満を上陸してから乱痴気騒ぎで晴らすのであり、それゆえに、「円形の孤独」の死の海の真実の意義を知らない精神的「おか者」にすぎないのだが、「円形の孤独」の死の海と同じ内的意義をもつ「闇黒大陸」の死の海の真実の意義を知らぬ支配人もまた「陸に上った水夫」そっくりであり、精神的「おか者」である。

彼はなにひとつ独創ということがなく、できることといえばきまった日課を惰性的に続けてゆくこと――ただそれだけだ。しかし彼は大した男であった。彼が大した男であったのは、こういう男の行動原理が一体何なのか全然見当もつかないというこの瑣末な一事によってであった。彼はその秘密を決してひとに洩らすことがなかった。おそらく彼の腹の中には何もなかったのではないか。そんな疑惑にふと捉われるのだった――というのはあの外地では外部的な拘束など何ひとつなかったからだ。かつて様々な熱帯病に出張所の「代理人(エイジェント)たち」が殆どひとり残らず倒れたとき、彼が「この外地へやってくる人間は内臓(はらわた)をもっていちゃいけないんだ」と言うのが聞えた。そのときも彼はその発言を例の薄笑いでもって封印した。まるでその薄笑いが、彼が番をしているある暗黒界に通ずる扉みたいだった。一瞬なにかが見えたと想ったが――しかしもうそのときには封印が押されてしまっているのだった。(七四頁)

この支配人は彼の行動原理が一体何なのか見当もつかない、得体の知れない人物であるというただその一事によって「大した男」であるという。彼はその秘密を決して洩らさないという。おそらく彼の腹の中には秘密にしなければならないような得体や行動原理など最初から何もないのではないかという。実際、「闇黒大陸」の文明人たちには、文明世界にいたときとはちがって、他人の眼を気にし物事を秘密にしなければならぬような外部的拘束などなにひとつなく、「自制」をかなぐり棄てて自分をさらけ出そうと思えばできるはずなのに、それでも秘密を洩らさないというのは、最初から彼の腹の中には隠すべきなにものもないからである。まさしく彼は最初から「うつろなる人」、内臓(はらわた)のない人間であり、だからこそ「彼の腹の中には何もなかった」(…there was nothing within him.)のである。その彼が、出張所の代理人(エイジェント)たちが殆ど全員熱帯病に倒れたとき、「この外地へやってく

る人間は内臓（はらわた）をもっていちゃいけないんだ」、と冷然と言い放ったということはまことに興味深い。なぜなら彼は内臓のない人間だからであり、内臓がないゆえに熱帯病にも罹らず、「肉体的健康の総崩れ」の中にあって独り健康を勝ち誇っていることができたのである。それはまさしく内臓なき健康だ。「うつろなる人」の健康だ。しかし内臓がなければ、人間ではない。だから、内臓がありそのために熱帯病に倒れた人びとの方がはるかに人間的である。ここでもまた問題はすでに主体的問題となっている。というのは、ここでは「肉体的健康」はいわゆる単純な「肉体的健康」ではなくなっており、内臓がなくそれゆえ独り健康を勝ち誇るこの支配人も勿論いわゆる肉体的内臓はもっているからである。問題は彼の肉体的健康の勝利が自己満足的な「おか者」の健康の勝利となっているということである。同じ自己満足的「おか者」であった出張所の「代理人（エイジェント）たち」は、熱帯病に倒れることによって彼らの「堅い大地」の迷妄を破られ、外にして内なる「闇黒大陸」の「死の海」に直面するに至ってはじめて「おか者」としての自己の正体とその空しさを自覚する契機を与えられるのであるが、その意味では彼らは外にして内なる「闇黒大陸」の闇の力の発現たる、外にして内なる「熱帯病」に倒れたわけであり、主体的にみるとき、そこに実は運命の女神の愛の手が彼らを人倫的存在としての復活へと導くべく働いているのであって、彼らが肉体的内臓があるために熱帯病に罹ったのだとすれば、それは人倫的内臓のない、うつろな人間――自己満足的「おか者」――であった彼らを、腹の中に人倫的内臓の詰った、ど根性と勇気に充ちた人間らしい人間に変容せしめるべき肉体的内臓になっているのである。そういえば、英語の「代理人（エイジェント）」(agent)とはラテン語のagereからきた単語で、「為す」「行動する」という意味を有するが、自己満足的「おか者」の「代理人（エイジェント）」は「堅い大地」の文明的迷妄にどっかり腰を下して動かないゆえに「エイジェント」ではなく、熱帯病に倒れ「堅い大地」の迷妄を打ち破られることによってはじめて眼前に開かれた内的「死の海」への船旅に向う、真に

人倫的に行動する「エイジェント」、つまり、外にして内なる「闇黒大陸」における人倫的エイジェント（行動者）として立つ可能性が出てくるのであり、また、根源的闇の力、大悲の愛の代理人なるエイジェントとして立つ可能性が出てくるのである。ところが熱帯病にも倒れない支配人の肉体的健康の輝かしい勝利は、先にもいったように、そのまま自己満足的「おか者」の肉体的健康の勝利となっているところに問題がある。彼は肉体的健康の勝利に酔い痴れることによって、外にして内なる「闇黒大陸」の「死の海」の事実とその内包する意義を自覚する契機に恵まれず、その意味においてこの勝利は実は内的敗北なのである。「おか者」の健康、正常とは正常ではなくて逆に「死に至る病」であり、支配人はすでに人倫的に死んでいるといわなければならない。内臓なき人間は生命なき人間である。実際、熱帯病に倒れた出張所の代理人たちの姿を冷たく見まわしながら、「この外地へやってくる人間は内臓をもっていちゃいけないんだ」、と言い放つことができるということは、彼が内臓なき人間であることの明証である。なるほど、外にして内なる「闇黒大陸」の「死の海」へやって来ながら、なお「堅い大地」の迷妄に耽り、自己満足的「おか者」としての虚妄の自己を保つには、彼自身いうように、「人間は内臓をもっていちゃいけない」、つまり、外にして内なる熱帯病にやられるような外にして内なる内臓をもってはいけないのだが、ところが実は、この外にして内なる「闇黒大陸」にやってくる資格のある人間は、支配人の言に反して、内臓をもっている人間だけなのだ。entrails（内臓）は guts であり、勇気、ど根性である。内臓のない「うつろなる人」である支配人は、彼自身の内的「闇黒大陸」の「死の海」を直視する勇気のない、無資格の、哀れな弱者なのだ。彼はまさしく受動的ニヒリズムの化身である。唇に表われる彼独特の薄笑いは、その背後に拡っている薄暗い内的空虚を包み隠し、彼をいかにも計り難い、底知れぬ人物のようにみえさせる薄笑いであり、「彼が番をしているある暗黒界に通ずる扉」、自然的ニヒリズムの内界に通ずる扉である。その薄笑い

にひとが感じるのは「ただの不安」、つまり、無自覚ながら実はその閉ざされた薄笑いの扉を通してその背後にある支配人の内的空虚に感じる「不安」である。しかしながらこの「ただの不安」は決して故なき不安ではない。支配人の自然的ニヒリズムの「死の海」に覚える不安は、実は不安を覚えるマーロウ自身の主体的問題にすでになっているのである。というのは、マーロウ自身も究極的には自己満足的「おか者」の迷妄の中にあり、つまり、自然的ニヒリズムの「死の海」を内的現実としているのであり、彼が支配人に覚える不安はそのまま、この内的「死の海」が醸成するところの、自己満足的「おか者」にとって脅威的な自己破壊力に他ならない。いいかえれば、彼は支配人を通じて実は彼自身の外にして内なる「闇黒大陸」の破壊的力を不安のかたちで暗号的に感じているのである。かくして支配人が普通人と変りがないということは、彼が普通人であるということ、彼のような人物が何処にでもいるということであり、つまり、「自己」自身であるということである。マーロウは支配人の中に偽善の悪魔を観ることにおいて、実はそこに彼自身を暗号的にみているのである。普通人であるということはまた目立たないということであり、従って看過し易いということであり、支配人が普通人と変りがないということは、単純に偽善の悪魔としての彼の正体が目立たない、看過し易いということではなく、それは何よりも、自己満足的「おか者」としての、つまり、偽善的悪魔としての自己の自然的現実が目立たないということ、看過し易いということなのである。このようにみてくるとき、自然的ニヒリズムの化身としての支配人の存在はマーロウ自身の自己を問いそれに応えることをマーロウに迫ってもいるわけである。つまり、うつろなる人であり、マーロウの最も忌み嫌うこの支配人は、丁度クルツが究極においてマーロウの分身であるように、思いもかけずこれまた究極において他ならぬマーロウ自身の分身となっているのであり、さらにいえば、クルツも支配人もマーロウも同じ「うつろなる人びと」なのであり、なによりもマーロウ自身の分身としての自覚において「うつろ

なる人びと」なのである。T・S・エリオットはまさしくこの事実を了解している詩人である。彼の詩『うつろなる人びと』(*Hollow Men*)の題詞に彼がクルツに仕えた黒人ボーイの言葉「クルツさァ、はァ死んだだよ」(深瀬基寛先生訳)を使ったことがその詩と共にそれを明証している。これを説明するならば、支配人は「闇の奥」のクルツを陥れるべく陰謀をめぐらすが、実は彼はそれを通して同時に彼自身の内的「闇の奥」になお死に絶えることなく「闇の心臓」として息づいている本来的自己を無自覚ながら陥れるべく陰謀をめぐらしていることになるのであり、かかる内的事実に無知であるゆえに支配人は絶望的な自然的ニヒリズムとして、「うつろなる人」である自己の事実を知らぬ(ゆえに)「うつろなる人」として立っているのである。しかしながら、マーロウ自身も究極的には支配人と同じ内的現実に立っている。というのは彼もまた、無自覚ながら、彼自身の内的「闇の奥」のクルツなる本来的自己を陥れるべく事ある毎に陰謀をめぐらしているのであり、その意味においてマーロウもまた「うつろなる人」であるといわなければならない。それはクルツ自身の内なる「闇の奥」のクルツ——本来的自己——に対するクルツ自身の態度についてもいえることであり、クルツもまたその意味において「うつろなる人」なのであるが、支配人とマーロウ・クルツとの間の唯一の根本的な相違は前者が絶望的な自然的ニヒリズムとして立っているのに対し、クルツは、あの「恐怖/恐怖/」の叫びに明証されているように、「うつろなる人」としての、「おか者」としての自己のこの決定的事実を死の直前に自覚するに至った自覚的な「うつろなる人」であり、マーロウもまたクルツとの出会いにおいてかかる内なるクルツに出会う、つまり、「うつろなる人」としての自己を決定的に自覚せる自覚的な「うつろなる人」として立ったというこの一事である。内なるクルツ——本来的自己——とは「うつろなる人」であることから遁れえない、それゆえに救われえない、というこの自己の救われなさの自覚、おのれ自身が地獄であることの自覚そのものの事であり、この自覚が自然的虚無(ニヒリズム)

を能動的虚無（ニヒリズム）に変容せしめるのであり、それゆえにこそ到り着いた「闇の奥」は「闇の心臓」(heart of darkness)として大悲の生命の鼓動をたからかに搏つのである。つまり、「救われなさの自覚」そのものが「闇の奥」であり「闇の心臓」であり大悲の生命の鼓動であり普遍的「クルツ」なのである。

さて、支配人はその輝かしい健康の勝利にも拘らず、すでに充分に「闇黒大陸」の死神に取り憑かれている。彼の健康の勝利そのものが、かかる内的虚無の自覚を妨げ彼を自然的ニヒリズムとして立たしめる当のものになっている。「うつろなる人」としての自己の自覚の欠如が逆説的にも彼を「うつろなる人」、内臓のない、実存しない、幻(phantom)の人間として立たしめているのである。彼が支配する「中央出張所」はその外も内も無秩序が支配する「歎かわしい状態」(七四頁)にある。門も垣も手入れされず、暗き自然の力の支配の下にあるだけではない。死神は「中央出張所」の内部にまで入り込み、その「アップルパイ的秩序」をすらすでに突き崩し、その「秩序」の無秩序的正体を曝露している。白人たちは食事の時間にしょっちゅう上席を争い、そのために支配人は「馬鹿でっかい円い食卓」を作らせて、自分の坐るところが最上席であとはどこも同じであるようにし、そのテーブルを入れるための特別な食堂を建てなければならなかったし、支配人のボーイは白人化した「栄養過多の黒人少年」(偽善的な白人文明を食べ過ぎて消化不良を起し、いまや生命的根源からとおく隔てられた)で、「支配人の見ている前で白人たちを腹立たしくなるような傲慢な態度で扱っても支配人は知らぬ振りをする」。「中央出張所」のすべてが無秩序の、非有の世界であり、「エイジェント」たちは人倫的行動者としての「エイジェント」ではなくて、動いていながら動いていない幻たちであり、食堂は「食堂」(mess-room)であると同時にまた「混沌の室（へや）」(mess-room)である。それはまたしても「不気味な背景幕の前で演じられる薄汚い茶番劇」(六一頁)である。

ところでマーロウが再び「クルツ」の名前を聞くのはこれまた「偽善者」からである。支配人は例の沈没事件についてマーロウに釈明をはじめるが、それは文字通り自己弁護である。「事態は『非常に深刻である、非常に深刻である』」(五七頁)という支配人の言葉は当の支配人自身にとってまことに切実な曖昧さを含んでいる。というのはクルツは支配人にとって、彼を追い越して出世する可能性が充分あるところの、彼の出世の妨げになる「最も腕利きの代理人(エイジェント)」であって、そのクルツが「病にたおれている」ということは願ってもないことなのであり、それが例の(陰謀としか考えられない)不自然極まる沈没事件を惹起したのであるが、しかし他方ではまた、クルツの病気が悪化してクルツが死ぬようなことにでもなれば、支配人は「他の代理人たちを全部束にした位の量の象牙」(六九頁)を独力で集めるという彼の部下の中で「最も腕利きの代理人」を失うことによって、支配人の大損失になるわけで、沈没事件によって救難の交代要員の到着をさらに数ケ月おくらせることにより、クルツの死を決定的にすることになりそうなのである。だからこそ支配人はおのれの利益からみて、「非常に不安」(七五頁)なのである。「事態は『非常に深刻である、非常に深刻である』」と支配人が言ったのは、真実にはそういう意味においてであるが、しかしその言葉の曖昧さはそれだけで解消するものではない。支配人がそれを本気で言ったとして、事態が非常に深刻であるのがクルツにとってであるとすれば、それは支配人にとって願ってもないことであり、また支配人自身にとってであるとすれば、これまた支配人の利益からみてのことであり、いずれにしても自我中心的である。しかしクルツがかくも支配人にとって脅威的存在であることの根底的意義は何か。それはクルツが支配人の出世という即物的利益を妨げる存在であることを通して、そのまま、自己満足的な「おか者」である彼の「堅い大地」の迷妄を妨げる脅威的存在だということである。そのようにみるとき、クルツは主体的にはそのまま支配人自身の内なる「闇の奥」のクルツとなっているわけであり、この内的クルツが外的クルツの

存在を通して支配人自身を自己破壊的に脅かしているのである。それゆえ、「事態は『非常に深刻である、非常に深刻である』」、と支配人が言ったとき、彼が心にもないことを言ったのであれ、心にあることを言ったのであれ、それはすべて自我中心の立場からの言葉であるゆえに、それは支配人自身の内なる「クルツ氏」つまり支配人自身にとって「事態は『非常に深刻である』」、といわなければならぬ。というのは支配人の内なるクルツ氏――本来的自己――が死の病に臥しているからである。それゆえ即物的な利益からみて本当に支配人にとって事態が非常に深刻であるとすれば、それは「本来的自己」という観点からすれば、支配人が歎くべきことではなくて真実喜ぶべきことなのである。実際、彼はこの外にして内なる「クルツ」に脅かされて「非常に非常に不安である」が、この不安に具現された外にして内なるクルツによって、彼は「うつろな人」としての彼の正体をあばき出されているのである。

彼が言うには、彼は「非常に、非常に不安」であった。たしかに彼は椅子に坐ったままでとてもそわそわし、「ああ、クルツ氏か」と叫んだが、塗端に手にしていた封臘の棒を折ってしまい、この偶然の出来事にわれながら呆気にとられたような様子だった。（七五頁）

封臘の棒が折れたとき、同時に彼のあの封印的薄笑いが破れて、これまでその背後に隠されていた彼の「うつろなる」正体が露呈されたのである。支配人の心に取り憑いたあの幻の「クルツ氏」によって曝露されたのである。まことにクルツ氏は「最も腕利きのエイジェント」である。それは支配人がいったような、象牙集めの最も上手な代理人（エイジェント）という単純な意味においてだけではない。彼はあのあの徹底した自己執着の行動を通して逆説的に

も本来的自己を探求する結果となったという意味で人倫的に「最も腕利きの行動者（エイジェント）」であったし、また、クルツ氏は外にして内なるクルツ氏としての存在意義をもつことによって、すべての自己満足的「おか者」たちを脅かし攪乱しているという意味で「最も腕利きの行動者（エイジェント）」であり、さらに、この内なるクルツなる「普遍的霊」「宇宙霊」(a universal genius) の「最も腕利きの代理人（エイジェント）」でもある。別にいえば、「おか者」の「堅い大地」の迷妄を脅かす内的クルツなる「本来的自己」即ち大悲の生命が「最も腕利きの行動者（エイジェント）」なのである。

ところで、機未だ熟せぬマーロウにとって、長い徒歩の旅の後、坐れともいわぬ支配人のおかげで「立ちつづけ」、疲れていらいらしているマーロウにとって、支配人の口から聞いた「クルツ氏」の名は、彼に「クルツなんかくたばってしまえ」と心の中で叫ばせるようなものでしかないが、彼の「闇の奥」への船旅の終極におけるクルツとのあの運命的な出会いからして、クルツはマーロウ自身の内的クルツとしての存在意義をもつゆえに、支配人なる偽善者の口を通してクルツの名を耳にするということは、同時に主体的にはマーロウがマーロウ自身である偽善者を通じてその内なる闇の声を耳にしている、つまり、偽善的自己の内なる自己破壊的闇の声を無自覚ながら耳にしているのである。支配人に船の修理にどれ位日数がかかるかと尋ねられて、「どうして僕に分るものですか。まだその難破船を見てもいないのに――そりや数ケ月はかかるでしょうよ」とマーロウは答えるが、これまた「二重レンズ」を通して了解されるべき言葉である。すでに述べたように、難破船は同時にボロ船「自己愛号」たるマーロウ自身の最初から難破した姿でもあり、「まだその難破船を見てもいない」とマーロウ・がいうとき、それは実際に「まだその難破船を見ていない」というだけでなく、実は最初から難破しているボロ船「自己愛号」というこの自然的現実を未だ自覚してもいないということでもある。マーロウにおいてはそれは外にして内なる「闇の奥」への船旅の果てにはじめて自覚されることになる「難破」なのである。

翌日僕は、例の出張所にいわば背を向けて仕事にかかった。救いになる生の事実にしがみついているにはそれしかないような気がした。それでも時々は、眼を周囲に向けなければならない。そんな時、僕の眼に入ったのはこの出張所であり、構内の日射しの中を所在なげにあちこちぶらついているこれらの連中の姿だった。一体これはどういうことなんだと時々自分に尋ねてみた。彼らは例のこっけいな長い棒を手にぶらぶら歩きまわっていた。まるで魔力にたぶらかされて腐った柵の内部に閉じ込められた大勢の信仰無き巡礼者たちといった恰好だった。「象牙」という単語が大気の中で響き、囁かれ、歎息まじりに吐かれた。傍からみたら、彼らが象牙に祈りを捧げているんじゃないかと思うほどだった。それら一切を通して一抹の愚かな強欲の汚臭がまるでなにかの死骸から匂ってくる死臭のように漂ってきた。いやはや。僕は生れてこの方あんなに空虚なものを見たことがない。そして、構外には、大地の上のこの胡麻粒ほどの開拓地を取り囲む沈黙の荒野が、この空虚な侵入の去るのを辛抱づよく待っているなにかこう、悪のように或は真理のように偉大で無敵なるものにみえたのだ。（七五―六頁）

翌日マーロウは「例の出張所にいわば背を向けて」仕事にかかる。「救いになる生の事実にしがみついているのにはそれしかないような気がした」と彼はいう。彼は偽善の悪魔が支配する出張所の虚無と無秩序に「背を向けて」難破船の修理に自分を打込まなければ、どうにもやり切れないというだけではない。その自分がこの出張所の虚無と無秩序の中に引き込まれ呑み込まれてしまうような気がするのであり、難破船の修理に自分を没頭させることによって辛うじてそれから免れ実在の世界にしがみついていることができるのである。出張所の構内では「象牙という単語が大気の中で響き、囁かれ、歎息まじりに吐かれ」る。代理人（エイジェント）たちは出世のために或はより

多くの歩合を貰うためにもっと象牙を手に入れ易い出張所への転任を画策する。彼らの頭の中にあるのはただただ象牙の幻だけである。前号ですでに述べたように、クルツの象牙への執着は偏執狂的に行動的であり、また象牙以外の何ものをも目的としない象牙への執着であるために、求められる象牙と求める自己との間に何ものも介在せず、自己が象牙であり象牙が自己であるような象牙への執着になっており、いいかえればその執着は求められる自己と求める自己との関係、つまり自己（への）執着、自己充足の欲求という実体を端的に表すものになっている。これに対し、これら代理人たちの象牙への執着はクルツほどの行動性がなく、地位や金銭への執着ゆえの間接的な象牙への執着であるために、この執着が孕む本質的問題がぼやけてしまっているが、それにも拘らずそれは自己執着、暗号的自己探求の問題であることに変りがないのである。彼らのこの自己執着は概念化による世界征服というかたちですでに無努力で充足されている、人倫的動きの全くない完全な「おか者」の自己満足的執着とは異り、暗号的ながら自己探求となっている自己執着である。その自己の探求は現実の虚妄の自己への暗号的不満と本来的自己の暗号的探求を意味するのであり、別にいえば自閉的自我の虚妄世界を脱却して無限に開かれた大悲の本来的世界に向おうとする暗号的意志を物語る。　それゆえに代理人たちもまた暗号的「巡礼者」であり、彼らの求める「象牙」は暗号的に本来的自己或は「大悲」の世界となっており、飢えた眼で「象牙」を口にする彼らは暗号的ながら「象牙に祈りを捧げている」のである。しかしそれが暗号的無自覚的であるがゆえに「信仰なき巡礼者」であり、しかもただ「象牙」という単語を「囁き、嘆息まじりに吐く」だけの非行動的な、それこそ内臓（はらわた）のない「うつろなる人びと」である。クルツにおける如く「本来的自己」の探求となるべき可能性を孕んだ彼らの象牙欲もその非行動性のゆえに現実にはただの「愚かな強欲」でしかなく、内臓のない、人倫的に死せる彼らの「死骸から匂ってくる死臭」でしかない。彼らは外にして内なる「闇黒大陸」の只中に折角身を

置きながら、自閉的な偽善的自我の「腐った柵」をおのれのまわりにめぐらして、「闇」の力の影響からおのれを隔て免れようと愚かにも試みる。偽善的「おか者」的自我を外にして内なる「闇」の中に投じ虚無の深淵に身を曝してこそ可能性が出てくるものを。しかしながら彼らの境位は、その「腐った柵」にも拘らず、外にして内なる「闇」によってすでに充分に侵されているのであり、彼らがおのれの境位に気付かないだけの話である。柵は最初から「腐っていて」すでに用に立たないのである。彼らがいかに「堅い大地」の迷妄の柵を自分のまわりにめぐらそうとも、彼らを取り囲む外にして内なる「闇黒大陸」の死の海の現実は変らない。むしろ自閉的な「おか者」の自我の柵もそのような現実の上に成立しているのであり、従ってそれはその現実の上に成立しながらその現実を無視しようとする自己矛盾的自我である。彼ら「信仰無き巡礼者たち」はその偽善的自我の柵の内部に留っているゆえに、二重の意味において非行動的である。マーロウとは異り「信仰無き」彼らは、この柵を越えて外にして内なる脅威的「闇の奥」―「大悲」の世界―への自覚的巡礼の旅をつづけるだけの勇気のない弱者であり、またあのクルツが象牙への妄執的執着に導かれて、この同じ柵を越えて外にして内なる脅威的「闇の奥」、虚無の深淵に自己を投じ、ついには計らずも結果的にはそれが「大悲」の本来的世界への巡礼の旅となっていたような、そのような自己破壊的な行動的な自己執着として立ってもいない。彼らの境位は、外にして内なる「闇」に背を向けることによって、かえってこの「闇」の魔力によって「腐った柵」の内部に閉じ込められ、しかもその事実に気付いてさえいない「たぶらかされた信仰無き巡礼者たち」の境位なのである。広大な「闇」の大地（「死の海」）の上のこの「胡麻粒ほどの開拓地」―偽善の「中央出張所」―を取り囲む外にして内なる沈黙の荒野は、まさしく、この痛くも痒くもない偽善の徒の「空虚な侵入」の立ち去るのを辛抱強く待っている「偉大で無敵なる」あの隠れいます闇の神であり、この神が「悪のように或は真理のように」偉大で無敵であるの

は、悪であり真理であるからである。というのは、人間における自然的なそして決定的な内的現実は、概念化による無努力の世界征服、自己執着の充足（そこから一切の自己愛的妄念や行為が生起する）を行いながらかかる自己を善しとして何の疑問ももたない自己満足的虚妄の自我、つまり、「堅い大地」の迷妄に耽る偽善的「おか者」としての自我であり、「大悲」とはこの自己満足的自己閉鎖的偽善を打ち破り、無限に開かれた本来的な愛の世界へと目覚めさせる「大悲」なのであって、自己満足的な「おか者」がこの「大悲」の脅威を「悪」と呼ぼうともそれは自己執着的立場からみた「悪」であり、彼自身の自己愛の投影としての悪しき神である。いいかえるなら、偽善的「おか者」にとってかかる「大悲」は「悪」である。なぜならその「悪」は自己満足的「おか者」の思量を全く越えた次元において実は「真理」だからである。どんな逆境であれ、またどんなに理不尽な逆境であれ、それはすべて「おか者」としての自己の「堅い大地」の迷妄を脅かしているというこの一点においてそれは「真理」の闇の光のとりわけ明らかにさしかけるところなのである。つまり、悪は、それが主体的に受けとめられるとき、つねに真理の地獄的表現である。まことにわれわれにおいて「真理とは主体性なのである」（キェルケゴール）。

かく主体的問題として悪をみてゆくとき、われわれのいわゆる善悪の判断がいかにしばしば自己愛の投影になっているかが分る。マーロウ自身もまたいまその事を問われているのである。彼が出張所に「いわば背を向け」仕事にかかったとき、それは彼自身がその出張所の無秩序の中に呑み込まれるのを免れるためのいわば自己防衛であったが、その自己防衛もまた主体的には彼の自己愛の表現となっていることに彼は気付いていないのである。「救いになる生の事実にしがみついているにはそれしかない」とは「出張所」の無秩序によって誘発されようとしているマーロウ自身の内的無秩序を暗号的に露呈している。だからこの「救いになる」（redeeming）は主体的には救いにならず、かえってこの内的現実の自覚を妨げることになるのであり、仕事に、我を忘れることは、た

だ我を忘れているだけのことであって、主体的問題の解決にはならず、我を忘れることによって実は我の問題を忘れ、それへの直面を先へ延ばしているのである。防衛されるべき「自己」自体が根底的にはこの「中央出張所」の自然的虚無（ニヒリズム）と同じものであり、「出張所」が主体的には彼自身の内的現実の客体的投影であるとすれば、この「出張所」に「背を向ける」ことによって彼は、その無秩序を対象的にしか問題にしておらず、同時に彼自身の内的現実にも「背を向ける」ことにもなるのである。勿論マーロウにおいても「出張所に背を向ける」ことの真意はそれが代表する一切の偽善的なるものに「背を向ける」ことであるが、そのような意味において「背を向ける」ということであれば、「出張所に背を向ける」とは「出張所」に面と向って立つような背の向け方でなければならない。つまり自己の内的現実に面と向って立つことである。本来なら、「出張所」の無秩序状態は直ちにマーロウ自身の内的秩序の現実を彼に自覚せしめる契機となるべきであったが、ここでもまたその時機未だ熟しておらず、「闇の奥」でのクルツとの出会いを待たなければならない。それゆえにこそ彼は「出張所に背を向けて」、外にして内なる「闇の奥」に船旅する為の難破船の修理に取りかからなければならないのである。

> 或る晩のこと、キャラコやサラサ、ガラス玉やその他いろんな品物が一杯つまった草葺の小屋が突然燃え出した。あまり突然だったので大地が深淵の口を開いて復讐の火を吐き出しそれらがらくたの一切を焼き尽させたのではないかと思いたくなるほどだった。僕は艤装を解いた僕の蒸汽船のそばで静かにパイプをくゆらしながら、連中が腕をたかくふりあげて火明りの中を皆跳ね廻っている姿を眺めていた……（七六頁）

偽善の悪魔の支配する「中央出張所」におけるこの突然の火事は彼らにとってまさしく地面から降って湧いた

ような「不幸な事件」（七七頁）であった。それは安物の商品との物々交換で高価な象牙をせしめるという搾取同然の彼らの商売にとって大きな打撃であった。この火事の原因が仮に彼らのいうごとくひとりの「黒奴」にあるとしても、彼らが受けたこの突然の打撃は「おか者」としての彼らの「堅い大地」の迷妄を突き破るものであった。彼らの足下の大地は実は保護の「堅い大地」ではなくて「闇黒大陸」の大地つまり「死の海」なのであり、これまで「堅い大地」の迷妄によって抑圧され、その迷妄の自己破壊性としてその内部にひそんでいた「死の海」――「闇黒大陸」の大地――が突然の火事というかたちで死の深淵の口を開いて復讐の火を吐き出し、「それらがらくたの一切」を焼き尽すことによって彼らの偽善的自己満足的「堅い大地」の迷妄を焼き尽しその正体を曝露したのである。実際「その焔は高く跳ね上り、すべてのひとを引き下らせ、一切のものを照し出した」（七七頁―傍点筆者）のであり、この「中央出張所の一切を」、彼らの外と内の「一切を照らし出した」のである。そしてその火を消そうとする彼らの姿は、「堅い大地」の迷妄を取り戻そうと跳ね廻る彼らの馬鹿踊り（cutting capers 参照）であり、しかも水を汲む「バケツの底に孔があいている」という底知れぬ「うつろ」振りである。しかし「一切を照し出した」その焔は「それから衰えて」しまわざるをえない。彼らは彼らの正体をそこに「照し出された」にも拘らず、それを自覚せず折角のその焔を徒らに衰えさせてしまうのである。それのみか彼らは逆に、「この不幸な事件を利用して」（七七頁）どうやら彼らの目の上のこぶであるクルツを陥れることを企む。彼らは徹底して偽善者であり「おか者」であり、逆境を主体的に受けとめてゆく積極的「苦悩の能力」をもたない「内臓のない人間」である。彼らは彼らにふりかかる「不幸な事件」をすら自己愛充足の具に転じようとする転んでもただでは起きない連中である。かくして焼き尽された「堅い大地」の迷妄は彼ら自身の無自覚ゆえに再び灰燼の中から死のよみがえりをみせるのである。しかしクルツに対する企みは同時に彼自身の内なるクルツ――

本来的自己――をさらに一層致命的に陥れる企みとなっているのである。彼らは「或る黒奴が火事を惹起した」といい、彼を打擲する。それが事実であろうとなかろうと、この火事は、彼ら文明人の「堅い大地」の迷妄を脅かしたのであるゆえに、それは彼ら自身の主体的問題としてみるとき、彼らが軽蔑し抑圧している彼らの内なる脅威的「闇黒大陸」或はその住人たる「黒奴」――本来的自己――が惹起した火事であり、「黒奴」を打擲しその火事の主体的意義を否定することによって、彼らはこの内なる「黒奴」を打擲しているのである。数日の間瀕死の状態にあった「黒奴」はその後「立ち上り、出て去った――そして荒野によって全き沈黙のうちに懐深く再び抱き取られた」（七七頁）という。この「黒奴」は、あの「死の森」の黒人たちと同じように、「闇の奥」のあの隠れいます神の「翼の下に集め」られた黒人であるが、同時にまたそれは、あの内的「死の森」の黒人たちのように、そのまま「神に廃てられし」家と化した当の偽善者の内的現実であり、彼ら自身の内なる「闇の奥」のあの黙せる隠れいます神の「翼の下に集め」られた内なる「黒奴」であって、彼らにおいて「苦悩の能力」が未だ完全に死に絶えず、彼らが人間として人倫的存在としてなお立っているかぎり、いまだ生命をとどめている本来的自己である。さりながら、「艤装を解かれた僕の蒸汽船」のそばで右の火事と偽善者たちの馬鹿踊りを傍観しているマーロウはそれが彼自身の内的現実でもあることを未だ自覚するに至っていない。だからこそ彼は「闇黒大陸」の只中にあって「艤装を解かれ」裸かにされた「自己愛号」たる自己自身を未だ自覚せず、その蒸汽船を背に傍観しているのである。

ところで、「この不幸な事件」を利用して一挙に宿年の野心の実現を企む偽善の「中央出張所」の総支配人は、その意気込みにも拘らず、さて行動する段になると、その輩下の「代理人（エイジェント）」たちと同じく「小指一本効果的に動かす」（七八頁）こともできない、まことに無行動者的な、その意味で非エイジェント的な、エイジェントである。

その意味では彼のスパイと噂されている或る「一流の代理人（エイジェント）」（七七頁）も、この支配人の手先（エイジェント）であるにふさわしく非エイジェント的（無行動者的）エイジェント（代理人）であるが、但し彼はさらにエイジェントでさえもないエイジェント（スパイ）という正体不明の人物である。なぜなら彼は「うつろなる」正体の、つまり、正体無き人物だからである。この「中央出張所」では総支配人をはじめすべての代理人（エイジェント）たちが無行動者的（非エイジェント的）エイジェントたちであって、やることといえばただ「なにかを待っている」（七七頁）ことだけであり、その間彼らはもっと歩合の稼げる交易地に任命してもらうべく画策し、「いかにも愚かしげに互いに陰口を叩いたり陰謀をはたらき合ったりして時間を紛らして いるのであった」（七八頁）。しかし待っていても何ひとつやって来ず、「やって来るものといえばただ病気だけであった」し、「その出張所に陰謀の空気が漂っていても、それからは何ひとつ出て来ず」、すべてがあらゆる意味で無行動的であり、それゆえに人倫的に「非在の」(unreal)死臭の漂う亡霊出張所であった。「時間を紛らす」とは自己が現に置かれている状況の実体を自覚せず、日常的自我の迷妄世界の中に欲求不満的に入り浸っていることである。彼らは「時間を紛らす」ことによって実は、みずから贋り上げた人倫的に無行動の、無時間的（日常的自我が問われることがなく従って無変化の）自己満足的世界を失うまいとあがいているのである。しかしながら「時間を紛らす」(They beguiled the time…)とは「時間を欺く」「時間をたぶらかす」ことであり、彼らがいかに無時間的世界を贋り上げてそれにしがみついても、それは迷妄に他ならず、時間性の事実は厳然として在るのである。彼らがやっていることは、彼らが目を蔽うべくもなくその只中に置かれている外にして内なる脅威的な時間の「闇黒大陸」、時間の「死の海」の現実の上に無時間的な日常的自我の迷妄を投影し、それを以てこの現実を隠蔽し「たぶらかす」ことである。しかしこれによって彼らが「たぶらかして」いるのは彼ら自身をである。この時間の「死の海」の存在意義を直視し

ようとしない彼らは、時間の「死の海」の内的声を「たぶらかす」ことによって彼ら自身を「たぶらかし」、彼ら自身の本来的自己の回復の可能性を「たぶらかし」ているのである。彼らは陰口や陰謀でひまを潰す（killing time）ことによって文字通り彼ら自身の存在の時間性とその一切の可能性を殺しているのである。しかし時間は決して殺されもたぶらかされもしない。なぜならこの時間は人間性そのものだからであり、この時間の「闇」は彼ら自身の内奥にあって「非在の」偽善的幻たちの消え去るのをじっと待っているのである。そうだとすれば、代理人たちが空しく「なにかを待っている」のは、彼ら自身無自覚ながら、「非在の」偽善的幻たちである彼ら自身が消え去り本来的自己へと復活する日を空しく「待っている」ことを意味するのであろう。尤も彼らは非エイジェント的（無行動者的）な偽善のエイジェント（代理人）――或は「筋肉のたるんだ（偽善の）悪魔の代理人、手先――であるゆえに、その待つ姿勢からは何ひとつ出てきはしないのである。（未了）